「石巻専修大学　研究紀要」第30号　93―103　2019年３月

# 読書教育と地域をつなぐ実践研究―ビブリオバトルを一例として

遠藤　郁子*

# A Practical Study of Reading Education to connect with Local Communities : Activities of Bibliobattle in Ishinomaki Senshu University

Ikuko ENDO*

*Department of Human Culture, Faculty of Human　Studies, Ishinomaki Senshu University,Miyagi 986-8580, Japan

## 1. はじめに

近年、いわゆる若者の活字離れ、読書に対する拒否反応について、さまざまな危惧がされている。2001年に、子どもの読書活動の推進に関する法律が施行され、以降、子どもの読書活動の推進に関するさまざまな施策や活動が積極的に行われてきているにも関わらず、今のところ、この傾向に歯止めをかけるには至っていない。全国大学生活協同組合連合会「第53回学生生活実態調査」によると、2017年の調査では、1日の読書時間が「0」という大学生が5割を超えたという(1)。

こうした統計は、現在の読書教育が必ずしも成功しているとは言い難い現状を浮き彫りにするものといえるだろう。それでは、現在の読書教育のどこに課題があるのだろうか。読書教育の現状とその方向性について概観することから、まずは課題をあぶり出す。その上で、課題と向き合う糸口を探る実践によって、課題解決の方策を考えていく。

## 2. 読書教育の考え方

まずは読書教育の現状とその方向性について確認しよう。2004年に文部科学省文化審議会から出された答申「これからの時代に求められる国語力について」では、以下のように、読書の重要性、読書教育の必要性が述べられている。

> 読書習慣を身に付けることは，国語力を向上させるばかりでなく，一生の財産として生きる力ともなり，楽しみの基ともなるものである。（略）読書は，国語力を構成している「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」「国語の知識等」のいずれにもかかわり，これらの力を育てる上で中核となるものである。（略）昨今「読書離れ」が叫ばれて久しいが，これからの時代を考えるとき，読書の重要性が増すことはあっても減ることはない。情報化社会の進展は，自分でものを考えずに断片的な情報を受け取るだけの受け身の姿勢を人々にもたらしやすい。自分でものを考える必要があるからこそ，読書が一層必要になるのであり，「自ら本に手を伸ばす子供を育てる」ことが切実に求められているのである。(2)

以上のように、読書は国語力育成の「中核」として位置づけられ、国語教育と連携しながら、「読書習慣を身に付けること」が求められている。そうした習慣づけの先に、この答申では、「受け身」ではなく、「自分でものを考える」ために「自ら本に手を伸ばす」、つまり自分から進んで本を読もうとする主体的な読者像がイメージされている。

そうした習慣づけの試みの中で、近年もっとも成功し、普及している試みの一つといわれているのが、「朝の読書」運動である。日本では、1988年に船橋学園女子高等学校（現、東葉高等学校）で提唱、実践された試みが契機となり、2002年には実践校が10,000校を超え、2005年には20,000校を超えたとされる(3)。朝のホームルームや授業が始まる前の10分間、自分の読みたい本を生徒

*石巻専修大学人間学部人間文化学科

と教師がそれぞれに黙読するという活動だ。感想などは一切強要されない自由読書の形がとられている。

全国の小・中・高等学校の児童生徒の読書状況について、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同で毎年行っている調査では、（図 1）のような結果が公表されている[(4)]。

この結果からは、1990 年代後半をピークに、2000 年代初頭にかけて小中高いずれも不読者の減少傾向を読み取ることができる。こうした動きを、先に挙げた「朝の読書」運動など、学校における読書教育が一定の効果を挙げていることの証左とすることは可能だろう。2018 年現在では、小中学校での「朝の読書」実施校は全体の 8 割を超え、高校でも 4 割で実施されているという[(5)]。

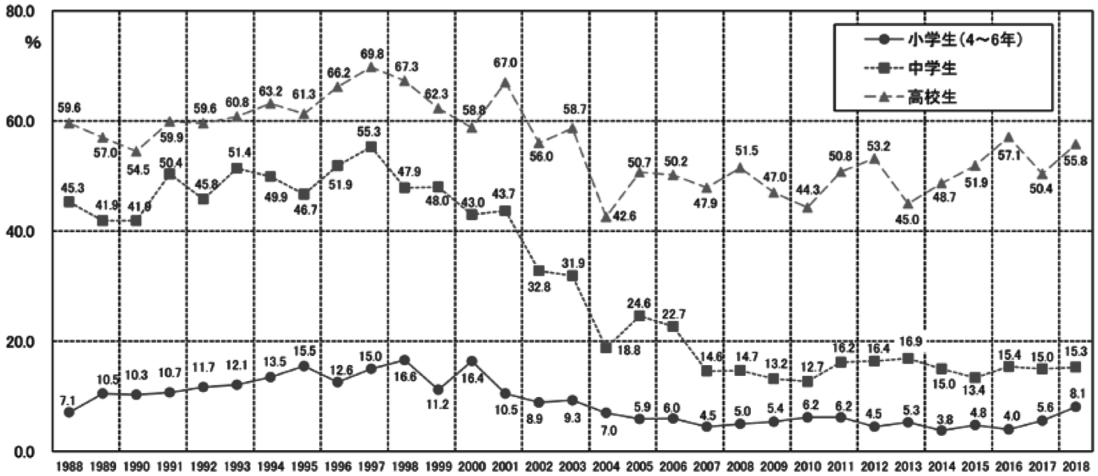
このように広く実践されるようになった「朝の読書」運動による自由読書の習慣化の先には、いつしか 10 分という時間制限なしに、場所も学校に限らずに、自分の自由な時間を利用して読書が行われるようになることへの期待が含まれていよう。

しかし、そうした期待をもって（図 1）を眺めたときに気になるのは、ここ 10 年間の横ばい傾向だ。2018 年の調査結果では、不読者の割合は、小学生は 8.1%、中学生は 15.3%、高校生は 55.8% となっており、この 10 年、その数字には大きな増減は見られない。年齢が上がるごとに不読者が増加する現状から読み取れるのは、小中学校時代には本を読んでいた子どもたちが、高校生になったら読まなくなっているという現実である。

現在の読書教育が一定の効果をあげ、数字上、小中高校生の不読者の減少傾向を指摘できるとしても、それは学校での実施という強制力によって作り出された数値なのかもしれない。もし学校の強制力がないと不読者が増えてしまうのだとするならば、現在の読書教育の取り組みによってどれほどの主体的な読者が育っている、あるいは、育ってゆくのか、楽観的に語ることはできないだろう。

高校生の不読者 55.8% という数字は、1 節であげた大学生の不読者 5 割以上という数字とかなり近い値に見えるが、高校卒業者の大学進学率が 6 割弱である現状[(6)]から考えると、高校時代は本を読んでいたのに大学生になってから読まなくなった層が存在する可能性も十分に考えられる。学校の強制力を離れたところでは、自ら本を読む人が育っていないのだとしたら、学校教育の枠組みを主として行われている現在の読書教育の方向性には何か欠落があるということかもしれない。

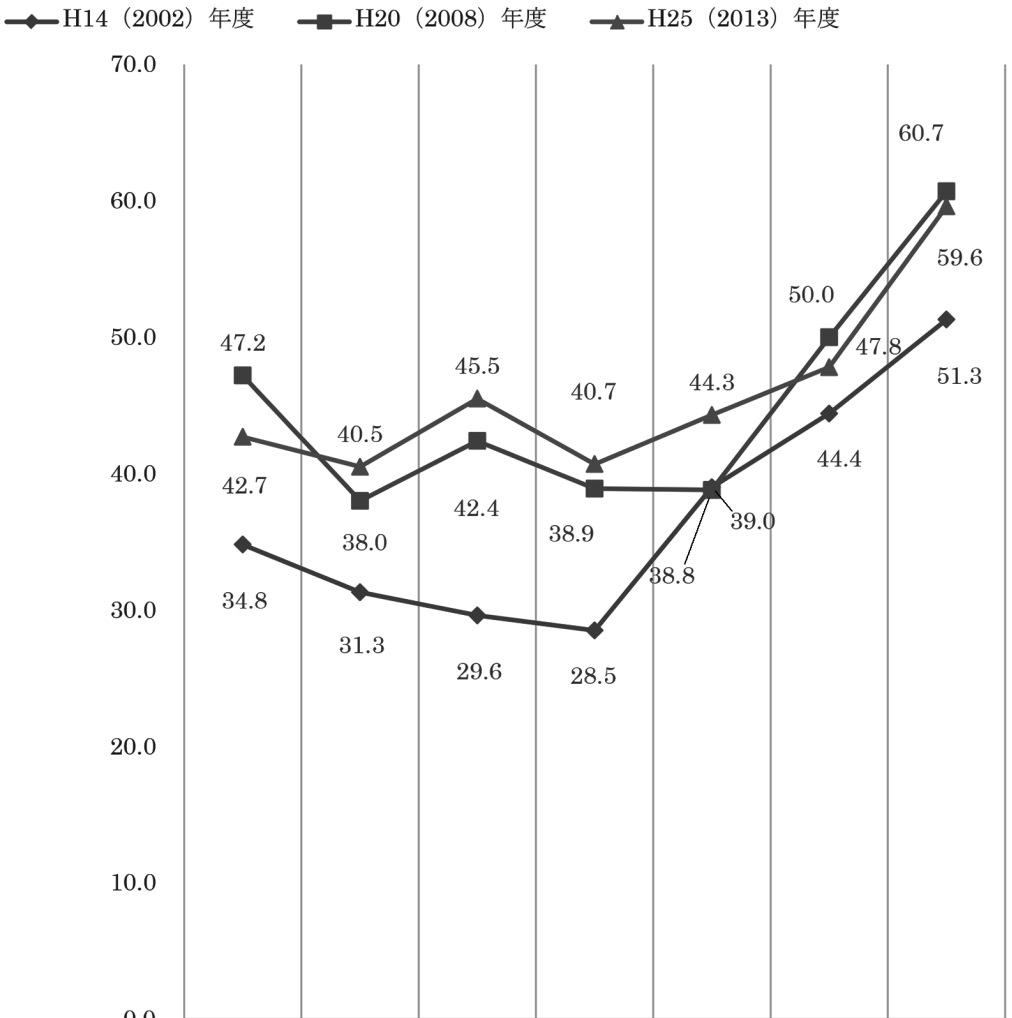
しかし、そもそもこれらの不読者数はそれほど高い数字なのだろうか。16 歳以上の一般男女を対象とした文化庁「国語に関する世論調査」（2013 年）[(7)]では、「1 か月に大体何冊くらい本を読んでいるか」という問いに対して、「読まない」の割合が全体の 47.5% と最も高くなっている。




（図 1）「過去 31 回分の不読者（0 冊回答者）の推移」（「「第 64 回学校読書調査」の結果」http://www.j-sla.or.jp/material/research/64dokusyotyousa.html）

（図 2）によると、どの年代でも 4 割以上の不読者が存在していることが分かる[8]。この統計によるならば、日本は、若者に限らず、4 割を超える人が本を読まない社会になっているのだ。そのような社会で、若者にだけ学校で強制的に本を読ませて、自分から本を手にする主体的な読者など、本当に育つのだろうか。

2017 年 3 月 8 日「朝日新聞」の読者からの「声」欄には、「読書はしないといけないの？」と題された大学生の疑問が寄せられている。「しないといけない」という表現には、義務のように誰かに強制されるものとしての読書観と、それへの反発が垣間見える。もちろん、読書は「しないといけない」というような強制によってなされるべきもの




| | 16～19歳 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70歳以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H14（2002）年度 | 34.8 | 31.3 | 29.6 | 28.5 | 39.0 | 44.4 | 51.3 |
| H20（2008）年度 | 47.2 | 38.0 | 42.4 | 38.9 | 38.8 | 50.0 | 60.7 |
| H25（2013）年度 | 42.7 | 40.5 | 45.5 | 40.7 | 44.3 | 47.8 | 59.6 |

（図 2）　1 か月に本を 1 冊も読まない【年齢別】（%）（文化庁「平成 25 年度　国語に関する世論調査」より作成）

ではないだろう。この大学生の存在は、現在の読書教育が目指している主体的な読者像とはかけ離れた読書観が若者の中に育まれている現実の一端を映し出している。こうした若者の問いに向き合うことが、社会として求められているのではないか。

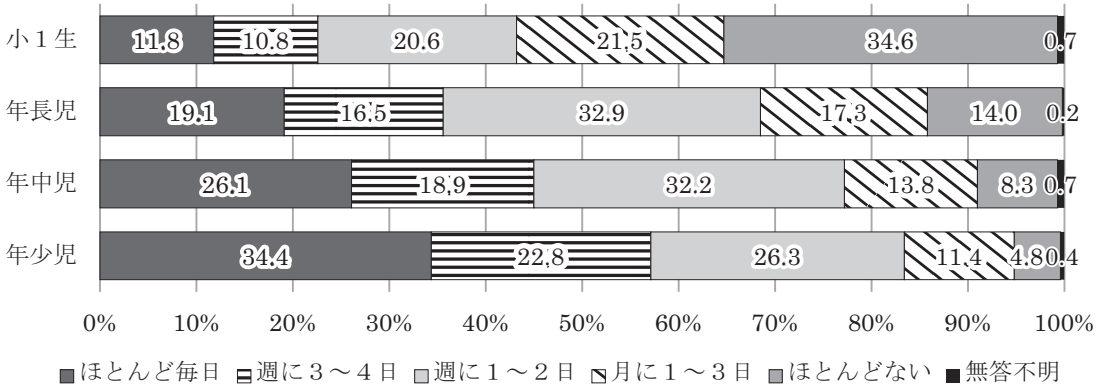
### 3. 主体的な読者という幻想

本来、読書とは、「しないといけない」というような苦役に似たものではない。そう思わせてくれる事実も身近に見つけることができる。乳幼児期の子どもたちの様子を見ると、読書に対する否定的な見方が一面的なものであることに気付かされる。

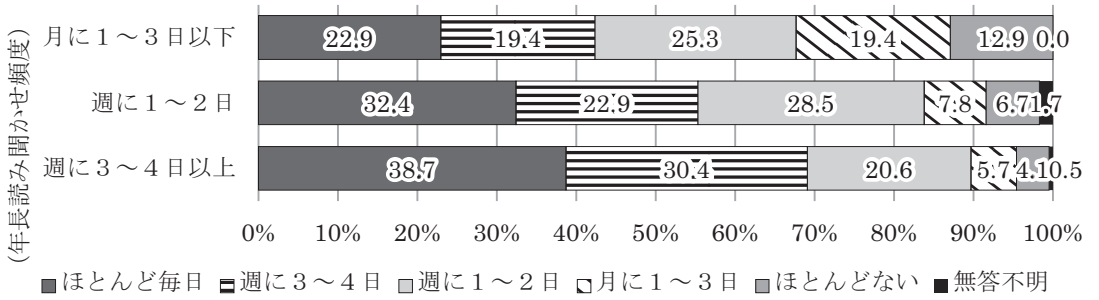
現在、多くの自治体で0歳児に絵本をプレゼントする「ブックスタート」の取り組みがなされ、さらに、公共図書館などでも積極的に絵本の読み聞かせがなされている。保育園や幼稚園でも、家庭の中でも絵本の読み聞かせは多く取り入れられている。一番の読書家は保育園、幼稚園児ではないかと考えられるほど、彼らはかなり多くの本に接している。そんな中で、子ども自身が読みたい絵本を自ら見つけて開く様子も決して珍しい光景ではない。彼らを見ていると、彼らが読書を好み、楽しんでいることがよく分かる。

まだ文字が読めない子どもたちの読書は、読み聞かせという形で行われることが多い。本を読み聞かせてくれる他者が媒介として必要不可欠な読書の状態は、未熟な読書の形として捉えられるかもしれない。特に、先の「朝の読書」運動の延長線上に見出せるような、一人で黙々と本を黙読する姿を主体的な読者のモデルとして捉えている場合には、読み聞かせで本を楽しむ状態は、一人で本が読めるようになるまでの過渡的な読書形態のように見える可能性がある。

ベネッセ教育総合研究所では、「幼児期から小学生の家庭教育調査」として、2012年から16年の5年間にわたる縦断調査を行っている[(9)]。こ




（図3） 絵本や本の読み聞かせの頻度（%）（ベネッセ教育総合研究所『速報版幼児期から小学１年生の家庭教育調査』から作成）




（図4） 子どもが１人で絵本や本を読む（見る）頻度（小1）（%）（ベネッセ教育総合研究所『速報版幼児期から小学１年生の家庭教育調査』から作成）

の調査には、子どもの読書と親の読み聞かせの関係についての質問項目があるが、(図3)のとおり、家庭での読み聞かせの頻度は年齢が上がるにつれて減少していき、小学1年生では3割以上の家庭で読み聞かせは行われなくなっている[10]。小学校1年生では平仮名、カタカナなどの基本的な文字を学び、そうした学びと連動した形で一人でもなんとか文章を読めるようになる子どもが増えてくる。子どもがある程度、一人で文章を読むことができるようになれば、読書も一人でできると期待したくなる。そうした思考の流れが、意識的にせよ無意識的にせよ、子どもが一人で読書できるようになることをある種の成熟と見做し、そこへ向かうことを好ましく考える傾向を作り上げているのではないか。

この調査では、(図4)に示すように、年長期の読み聞かせ頻度と小学1年生になってから子どもが一人で絵本や本を読む（見る）頻度との相関関係についても調査されている。こうした相関関係に対する関心は、読み聞かせから一人読みへと移行していく読書形態の発達イメージを内に抱えたものと考えられる。そこには、一人読みを成熟した読書のスタイルと考える読書観が透かし見える。

このように一人で自由に黙読する姿をモデルとする現在の自由読書の思想を、塚田泰彦は批判的に捉え、以下のように述べる。

> 黙読が中世以降に定着した比較的新しい読書スタイルであること，また今日普及している自由読書がこの黙読による個人の密かな楽しみに支えられていること，このことは一方で声に出して読むこと（音読・暗誦・読み聞かせ）の本質的意義を改めて喚起する。[11]

塚田は、黙読による一人読みのスタイルで普及している自由読書が、現代においては多数の不読者を生み出していることを指摘しながら、「声に出して読むこと」の有用性を改めて再評価することを主張している。ここでの塚田の関心は、「声に出して読むこと」の有用性を読書科学や心理学的な側面から裏付ける方向に向かっており、例えば「暗誦に伴う理解と記憶の相互作用の有用性」といった、発声すること自体によって発声者に生じる有用性が指摘されている。

しかし、「声に出して読むこと」の重要性は、別の角度からも再評価されていいのではないだろうか。「声に出して読むこと」が黙読と大きく異なる点としては、発声されることによって、読書が孤独な行為ではなく、他者と共有され得るものになるということが考えられる。現在の読書教育は、そのような他者との共有という観点から、もう一度見直されるべきなのではないだろうか。

読み聞かせの実践の効用はさまざまに指摘され得るが、読み聞かせが子どもたちに好まれ、その関心を引き付ける要因のひとつには、読み手と聞き手による読書の〈場〉の共有という要素をあげることができる。子どもたちにとって、読み聞かせの〈場〉は、読み手である大人とのコミュニケーション空間としての意味を持っている。子どもたちが読み聞かせを好むのは、読書を好んでいるというだけでなく、読み手とのコミュニケーションを好んでいるという側面が多分にある。

読書教育において目指されるべきは、孤独な黙読へと子どもたちを誘うことよりも、誰かと読書の楽しみを共有できる〈場〉を保障し続けることなのかもしれない[12]。そして、「自ら本に手を伸ばす」主体性だけでなく、読書の楽しみを誰かと共有できる〈場〉に参加することの意味づけをもっと積極的に行ってもいいのではないだろうか。そうしたシフトチェンジによって〈共有できる読者〉が立ち現われてくることが、現在の読書教育の停滞状況においては重要な意味をもつと考えられる。

## 4. 〈共有できる読者〉へのシフトチェンジとビブリオバトル

〈共有できる読者〉へのシフトチェンジのためには、読書の楽しみを共有できる〈場〉が必要となる。家庭や学校での絵本の読み聞かせを継続的に行っていくことで、その〈場〉はある程度は保障されていくかもしれない。小中学校での「朝の読書」運動も、本来は、読書の共有の〈場〉としての機能を備えており、その意味で成功している取り組みも多くあるはずだ。しかし、学校のような強制力が発揮される〈場〉が読書の楽しみを掬

い損ね、先にあげた大学生のような読書への拒否反応さえ育成する結果に加担してきた可能性を考えると、現在においては、もっと開かれた形で読書を共有できる〈場〉が必要とされるのではないだろうか。学校教育のような閉鎖的な〈場〉に留まる実践ではなく、より広く社会と結びついた共有の実践が志向されることが、拒否反応の軽減につながり得る可能性がある。

その可能性を実践の中で探るための素材のひとつとして、本研究では、近年広がりをみせているビブリオバトルを取り上げた。ビブリオバトルとは、2007年に京都大学大学院情報学研究科に所属していた谷口忠大によって、研究室のメンバーによる勉強会のひとつの形式として考案された書評ゲームである。2010年にはビブリオバトル普及委員会が設立され、全国の大学からビブリオバトラーが集う「ビブリオバトル首都決戦」が開催された(13)。現在では、大学生だけでなく、小中高の教育現場、図書館、書店など、さまざまな場所で楽しまれている。「人を通して本を知る．本を通して人を知る」がキャッチコピーの、本の紹介を通じたコミュニケーション・ゲームで、ルールも非常にシンプルで分かりやすい。

【公式ルール】

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる．
2. 順番に一人5分間で本を紹介する．
3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2〜3分行う．
4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員で行い，最多票を集めたものを『チャンプ本』とする．(14)

ビブリオバトルでは、発表参加者をバトラーと言い、発表はせずにディスカッションと『チャンプ本』投票を行う参加者をオーディエンスと呼ぶ。バトラー自身がそれぞれに読んだ本の紹介をし、その紹介を受けてバトラーとオーディエンスの全員で討論するという形で、一方的な本の紹介ではなく、読書の〈場〉の共有を実現している。また、最後に全員で『チャンプ本』を選ぶということも、共有のひとつの形態といえるだろう。読書自体が行われる〈場〉ではないが、この実践が「共有する読者」育成のために有効性を発揮する可能性は十分にあると考えられる。

ビブリオバトルの実践に関する研究は、少しずつ蓄積され始めている。考案者である谷口忠大らによる「ビブリオバトル：書評により媒介される社会的相互作用場の設計」では、ビブリオバトルの枠組みを「書籍情報共有機能」「プレゼンテーション能力開発支援機能」「良書探索機能」「コンテンツ生成支援機能」「インフォーマルコミュニケーション支援機能」という五つの機能に整理し、特に、「プレゼンテーション能力開発支援機能」についての有効性を示す実験結果が報告されている(15)。

一方で、「ビブリオバトルは、その表面上の姿が本好きの読書会の姿をしているために「人を通して本を知る」側面ばかりが着目されがちであるが、「本を通して人を知る」というコミュニケーションの場づくりの側面こそビブリオバトルの本質である」(16)という谷口自身の発言もあるように、読書教育的な発想からビブリオバトルがとらえられがちであることへの違和感が示されており、ビブリオバトルを読書との関わりから論じることには慎重さが求められている(17)。

こうした流れの中で、プレゼンテーション能力の向上やコミュニケーションの側面を視野に入れた教育現場でのさまざまな実践報告が見られるが、地域の中での取り組みについてのまとまった報告はまだあまり見られない。

そのため、本研究では、2017年度に石巻専修大学図書館において2度のビブリオバトル実践を行い、石巻専修大学の学生だけでなく、教職員や地域住民に対しても参加を働きかけ、地域の中に読書を共有する〈場〉を生み出す可能性を模索した。

1回目の実践は、ビブリオバトルに関する説明と体験をセットにした講習会で、ビブリオバトル普及委員会から講師をお招きして行った。ワークショップ形式で、参加者全員がグループに分かれてそれぞれにバトラーとなってビブリオバトルを体験した。2回目の実践は、バトラーとオーディエンスをそれぞれに公募し、イベント形式のビブ

リオバトルを行った。バトラーには、学生3名と教職員・一般3名の計6名が参加し、順番にオーディエンスの前で本の紹介を行い、オーディエンスを交えた討論の後に、全員で『チャンプ本』の投票を行った。

以下が、それぞれの実践概要とアンケート結果からの抜粋である。

実践Ⅰ 2017年10月21日（土）10：00〜12：00 ビブリオバトル講習会（於：石巻専修大学図書館）参加人数：21名〈学生17名（SA4名含む）、教職員：4名〉、アンケート回収枚数：18枚／回収率：86％。

実践Ⅱ 2018年1月20日（土）10：00〜11：30 ビブリオバトルin石巻専修大学（於：石巻専修大学図書館）参加者：34名〈学生24名（SA4名含む）、教職員・一般：10名〉、アンケート回収枚数：31枚／回収率：91％。

## 5. 実践を終えて

今回、ワークショップ形式とイベント形式の2種類のビブリオバトルを行ったが、アンケート結果からは、どちらの実践においても参加者の満足度がかなり高いものであったことが分かる。「今後、ビブリオバトルの企画があれば、また参加したいですか」「今後、石巻専修大学学生と地域の方々との交流企画があれば、参加したいですか」という質問項目については、どちらの実践でも多数が「したい」と回答しており、ビブリオバトル

（表1）　実践Ⅰ　アンケート結果（抜粋）その1

| アンケート項目3. 講習会に参加した感想をご自由にお書きください。 | |
|---|---|
| 教職員 | 学生さんの発想も豊かで、思いのほか色々な本を読んでいることに、感心しました |
| | 固い講習会かと思っていたが楽しい会でありました。これなら楽しんでやれますね。 |
| | 楽しかったです。学生たちのすばらしいアイデアにびっくりしてうれしくなりました |
| | 講師の先生の進行が気持ちいい位スムーズで良かったです。学生の楽しそうな顔が印象的です。 |
| 学生 | せっかく暇だったので有効的に使おうと思って参加しました。でも参加して良かったです。チャンプ本に選ばれてうれしいです。 |
| | 知らない本を知ることができて楽しかった。 |
| | 自分が知らないジャンルの本に興味ができた |
| | みんなの面白い本を見れてよかった |
| | 紹介するのが、なかなか難しく、時間配分が難しかった |
| | 楽しかったです |
| | 意外と面白かったし、新たに読んでみたい本が増えた |
| | 難しそうだなと思っていたが、意外と軽くできるものだなと思った。 |
| | 違うビブリオバトルで紹介した本を今回も紹介したが、その時とはまた違った紹介の仕方に無意識になったので、自分で意外だった。 |
| | 本によってその人の興味がわかることがいいと思った。本がきっかけで話が盛り上がった |
| | 楽しかった。 |
| | ある程度リラックスしてできた |
| | 思った以上に、ビブリオバトルは気軽にやれるものなのだなと思った。 |

（表2）　実践Ⅰ　アンケート結果（抜粋）その2

| アンケート項目 | したい | したくない |
|---|---|---|
| 4. 今後、ビブリオバトルの企画があれば、また参加したいですか。 | 17名 | 1名 |
| 5. 今後、石巻専修大学学生と地域の方々との交流企画があれば、参加したいですか。 | 18名 | 1名 |

（表 3）　実践Ⅱ　アンケート結果（抜粋）その 1

| アンケート項目 3. ビブリオバトルに参加した感想をご自由にお書きください。 | |
|---|---|
| 教職員・一般 | バトラーで参加したのですが、足が震えてしまったので座ってできるといいなと思いました。とても楽しかったので、もっとたくさんの人に知って参加してもらえるといいですね。 |
| | 楽しかったです |
| | 「本を紹介する」ことの楽しさを、改めて思い出しました。 |
| | 本を読まない人にこそ参加してほしい企画だと思いました。バトルの前に自己紹介があると背景がわかってより理解が深まると思いました。参加者みんなで予選をしても参加型のより楽しい企画になるかもしれませんね |
| | 他者の読書体験に刺激を受けました。世界が広がりました。本好きには、とてもワクワクする企画です。ただ、バトルと銘打たれている点にはやや疑問も。ゲーム感覚をあまり意識しなくてもいいのではないでしょうか。 |
| | 学生さんがどんな本を選ばれるのか興味がありました。それぞれ楽しかったです。“1 つの本を”は難しくて、みんな読みたくなりました。 |
| | たのしい　もっとやりたい |
| | 大変楽しかったです。ビブリオバトルを見るのは初めてでしたが、本に興味を持つには、誰かの紹介というのはすごく効果的だと思いました。 |
| | 楽しく聞けました |
| 学生 | 小説からマンガまで、自分が知らない本を紹介していただき読書について興味を持った |
| | 読んだことのない本ばかりだったが話を聞いてどれも読んでみたくなった。 |
| | 普段本を読まないので色々な本を知れてよかった。小説だけかと思っていたけどマンガや絵本もあって面白かった。 |
| | 頭の中がまっ白になりました。リベンジしたい。 |
| | かなり緊張したけど、うまく話せて良かった。 |
| | 楽しかった。 |
| | 楽しそうに本の紹介をされていてとてもおもしろかった。 |
| | 色々な本があり興味を持った。 |
| | 様々な本の紹介をきけてためになった。 |
| | 多種多様の本の話を聞けて、興味がわいてきて楽しかったです。 |
| | 小説だけでなくマンガや絵本などもあっておもしろかった |
| | 楽しかった |
| | 発表がしっかりしていてすごいと思った |
| | 意外と面白かった |
| | 意外と楽しかった |
| | 本をあまり読まないのでどのような本があるのか興味深かった |
| | 自分も本を読みたいと思った |
| | 多種多彩な本があり楽しめた |

（表 4）　実践Ⅱ　アンケート結果（抜粋）その 2

| アンケート項目 | したい | したくない |
|---|---|---|
| 4. 今後、ビブリオバトルの企画があれば、また参加したいですか。 | 29 名 | 1 名 |
| 5. 今後、石巻専修大学学生と地域の方々との交流企画があれば、参加したいですか。 | 27 名 | 2 名 |

も地域の中での交流も、ともに受け入れられる土壌が十分にあることも示された。

自由記述の回答には、「自分が知らないジャンルの本に興味ができた」「自分も本を読みたいと思った」など、参加者の読書に対する関心の高まりを示唆するものも多く、「本をあまり読まないのでどのような本があるのか興味深かった」のように、不読者層に働きかける可能性も見出せる結果であった。

また、実際に、実践Ⅰの講習会参加学生の中から、実践Ⅱのバトラーに自主的に手をあげた者も1名出た。このことは、ビブリオバトルの継続的な取り組みよって、読書の共有の〈場〉を構築していける可能性も示唆しているといえるだろう。今回の実践研究によって、地域につながる読書教育の可能性の一端は示し得たのではないかと考える。

しかし、概ね好意的なアンケート結果ではあるが、今後の課題としていくつかの問題も浮かび上がる。たとえば、アンケートでは「また参加したい」という回答が大多数だが、実際に継続的な参加にどれほどつながるかは分からない。「楽しかった」という感想が目立つ一方で、実際に紹介された本を手に取って読むに至るかどうかもまた保証され得るものではない。そうした課題についても、今後、さまざまな形で検証しながら試みを続けて行く必要があると考える。

一方で、2013年の国立青少年教育振興機構『子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書』では、「この1か月で本を読んだか」という問に対して「読まなかった」と回答した高校生・中学生の理由として、「普段から本を読まないから」が高校生42.0%、中学生42.9%、「読みたい本がなかったから」が高校生32.2%、中学生41.0%と多数であったことが報告されている[(18)]。「読みたい本がなかったから」読まなかったと回答した多くの回答者たちにとって有効なアプローチのひとつは、読みたい本が見つかる環境を整えて、読書に対する関心と意欲を高めることだろう。今回の実践により、ビブリオバトルによって、読みたい本が見つかる可能性が認められたことは、実際に紹介された本を手に取って読むに至るかどうかは保証され得ないにしても、読書への関心と意欲を芽生えさせるきっかけにはつながっている。

今回の実践で取り上げたビブリオバトルは、読書の楽しみを共有できる〈場〉への参加を若者たちに働きかけるための、あくまでひとつの方策である。地域の中で誰かと読書の楽しみを共有できる〈場〉は、ビブリオバトルだけに留まらず、さまざまに構築することができるはずだ。今後も、読書を共有する〈場〉のさまざまな可能性を模索し、実践の中でその有効性を検討していくことが必要である。

## 【注】

(1) 全国大学生活協同組合連合会「第53回学生生活実態調査」(https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html参照。＊2018.10.03閲覧)。調査実施時期：2017年10～11月、調査対象：全国の国公立および私立大学の学部学生、回収数：10,021（30大学・回収率32.3%）。第53回学生生活実態調査は75大学生協が参加、18,999名から協力を得たが、ここで紹介されている数値は、経年での変化をより正確に見るために、毎年指定している30大学生協で回収した10,021名の平均値であるとされる。

(2) 文化審議会「これからの時代に求められる国語力について」(2004.2.3、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/008.htm 参照。＊2018.10.03閲覧)

(3)「朝の読書の歩み」(朝の読書推進協議会「朝の読書」公式ホームページ、http://www.tohan.jp/csr/asadoku/ayumi.html参照。＊2018.10.03閲覧)。2018年9月現在の実施校は、27,218校とされる（同、http://www.tohan.jp/topics/upload_pdf/asadoku_bunseki.pdf参照。＊2018.10.03閲覧)。

(4)（「「第63回学校読書調査」の結果」http://www.j-sla.or.jp/material/research/64dokusyotyosa.html 参照。＊2018.11.05閲覧)。調査時期：2018年6月、調査対象：全国の小学生（4～6年生）・中学生（1～3年生）・高校生（1～3年生）の抽出調査。小学生：2,730名、中学生：2,714名、高校生：2,976名とされる。

(5) 朝の読書推進協議会による調査では、2018年9月現在、小学校＝16,477校（81.0%）、中学校＝8,523校（81.4%）、高等学校＝2,218校（44.3%）と報告されている。(「朝の読書」公式ホームページ、http://www.tohan.jp/topics/upload_pdf/asadoku_bunseki.pdf 参照。＊

2018.10.03 閲覧)。

(6) 文部科学省「学校基本調査」(2018.5.1)、https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&tstat=000001011528&cycle=0&tclass1=000001021812&stat_infid=000031741053&second2=1 参照。＊2018.10.03 閲覧) によると、高校卒業生の大学・短期大学等への現役進学率は 54.8%、過年度卒業生を含めると 57.9%である。

(7) 文化庁「平成 25 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」(http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h25_chosa_kekka.pdf 参照。＊ 2018.10.03 閲覧)。この世論調査は文化庁が 1995 年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する目的がある。調査対象：全国 16 歳以上の男女、調査時期：2014 年 3 月、調査方法：一般社団法人中央調査社に委託し個別面接調査を実施、調査結果：調査対象総数 3,473 名、有効回答数（率）2,028 名 (58.4%)。

(8) (7) に同じ。

(9)「子どもの読書と親の読み聞かせ」(ベネッセ教育総合研究所『速報版　幼児期から小学 1 年生の家庭教育調査　縦断調査』2016.3、p17、https://berd.benesse.jp/up_images/research/20160308_katei-chosa_sokuhou.pdf 参照。＊ 2018.10.03 閲覧)。幼児期から小学校 2 年生までの子どもの学びの様子と母親のかかわりや意識をテーマに、郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）で行われたアンケート調査。調査時期は、2012 年～2016 年。調査対象は、2012 年の横断調査の回答者のうち、縦断調査に同意した母親約 1,500 名。2013 年調査では 1,460 名が回答。2014 年調査では 1,074 名が回答。2015 年調査では 544 名が回答。2016 年調査では 479 名が回答したとされる。この速報には 2015 年調査までの結果が反映されている。

(10) 文部科学省「親と子の読書活動等に関する調査報告書　平成 16 年度」(p42、http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05111601/001.pdf 参照。＊ 2018.10.03 閲覧) においても、自分の子どもに本の読み聞かせをしていた時期は、「6 歳になるまで (25.3%)」が最も多く、「6 歳になるまで」の累計で 6 割以上、「小学校低学年まで」の累計で 9 割近くとなっている。小学校低学年まででほとんどの家庭で読み聞かせが行われなくなる傾向が読み取れる。この調査は、公立の小学校 2 年生および 5 年生、中学校 2 年生及び高等学校（全日制普通科）2 年生の児童・生徒およびその保護者 5,882 組を対象とし、各学校から児童・生徒に手渡し、郵送回収された。調査時期は、2005 年 3 月。

(11) 塚本泰彦「読書の現在」(『情報の科学と技術』2016.10、p510)。原文の脚注は省略した。

(12) これは、もちろん孤独な黙読に価値がないという趣旨ではない。前田愛『近代読者の成立』(有精堂、1973.11) が指摘したように、孤独な黙読は近代読者に豊かな内面性をもたらした。しかし、そのように構築された読書に対する価値観は、読書をめぐる状況が大きく変化している現在、相対化されてもいいだろう。昨今、食育の観点から、子どもがひとりで食事をとる孤食状況が問題となっているが、読書においても、孤読状況がさまざまな問題を生んでいる可能性があると考える。

(13) 2010 年から 2013 年は「ビブリオバトル首都決戦」として東京で、2014 年からは「全国大学ビブリオバトル」として、活字文化推進会議主催、ビブリオバトル普及委員会共催の形で開催されている（全国大学ビブリオバトルホームページ、http://zenkoku.bibliobattle.jp/bibliobattle 参照。＊ 2018.10.03 閲覧)。

(14) 知的書評合戦ビブリオバトル公式ホームページより（http://www.bibliobattle.jp/参照。＊ 2018.10.03 閲覧)。

(15) 谷口忠大、川上浩司、片井修「ビブリオバトル：書評により媒介される社会的相互作用場の設計」(「ヒューマンインタフェース学会論文誌」2010.11、p427-437)。

(16) 谷口忠大『ビブリオバトル―本を知り人を知る書評ゲーム』(文芸春秋社、2013.4、p160)。

(17) 岡野裕行「ビブリオバトルを通して読書について考える」(前掲 (11)、p513-517) は、「ビブリオバトルを読書の推進という文脈で捉えるような考え方は，もともと構想されていたゲームの趣旨からすると，少々ずれた認識ということになる」としながらも、「ビブリオバトルによって，読書という概念は自分一人だけの静的なものから，複数の人同士の動的なコミュニケーションツールへと変わっていく」と捉えている。

(18) 国立青少年教育振興機構『子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書』2013.2、p21　※ http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/72/参照。＊ 2018.10.03 閲覧)。ちなみに、この調査で、「この 1 か月で本を読みましたか」という問に対して「読まなかった」と回答した高校生は 38.9%、中学生は 14.9%と報告されている。この調査では、成人

調査と青少年調査が行われており、青少年調査の調査対象は高等学校2年生と中学校2年生で、内訳としては、高等学校2年生300校中278校回収（回収率92.6%）10,227名、中学校2年生360校中338校回収（回収率93.8%）10,941名とされる。学校を通した郵送法による質問紙調査で、調査期間は2012年3月。

## 付記

本研究は、平成29年度IS奨学研究助成の成果の一部です。